【西洋絵画】

●切手デザイン

Tokyo Fuji Art Museum
TOKYO FUJI ART MUSEUM
東京富士美術館
西 洋 絵 画
作者名·作品名
①②③④⑤
⑥⑦⑧⑨⑩
①アルフレッド・シスレー〈牧草地の牛、ルーヴシエンヌ〉 ②ベルト・モリゾ〈テラスにて〉 ③カミーユ・ピサロ〈春、朝、曇り、エラニー〉
④カミーユ・ピサロ〈ロンドン、ハイドパーク〉 ⑤アンリ・ル・シダネル〈森の小憩、ジェルブロワ〉 ⑥クロード・モネ〈海辺の船〉 ⑦クロード・モネ〈睡蓮〉
⑧ピエール＝オーギュスト・ルノワール〈読書する女〉 ⑨エドゥワール・マネ〈散歩〉 ⑩ピエール＝オーギュスト・ルノワール〈赤い服の女〉
Tokyo Fuji Art Museum
NIPPON 52
○ 切手と写真部分を郵便物に貼って、ご利用いただけます。
写真部分だけでは、切手としてご利用いただけません。
○ 郵便料金納付のためにこの切手をご利用の場合、写真部分に消印がかかることがあります。

●解説書

西洋絵画

牧草地の牛、ルーヴシエンヌ　Cows in Pasture, Louveciennes

アルフレッド・シスレー
Alfred Sisley (1839 - 1899)

ルーヴシエンヌはパリ西郊、セーヌ河畔に位置する静かな村。高台へと続く曲がり道、空間の奥行きを表現する緑の樹木、青い空と白い雲。それらすべてが、シスレーの代名詞でもある、繊細な色彩と柔らかな筆触によって見事に調和している。

海辺の船　Boat Lying at Low Tide

クロード・モネ
Claude Monet (1840 - 1926)

1881年春に滞在したフェカンの港の景色。モネを含む印象派の画家たちは、意図的にパレットから黒色を遠ざけたことで知られるが、本作では、その黒を効果的に使用することにより、帆船の重量感や存在感を引き立てることに成功している。

テラスにて　On the Terrace

ベルト・モリゾ
Berthe Morisot (1841 - 1895)

1877年に行われた第3回印象派展に出品された記念すべき作品。印象派を擁護する批評家の目を奪い、賞賛を受けた。ノルマンディの避暑地フェカンの海辺を背景に、モリゾの親戚、ブルシエ夫人を描いている。モダンな感性による大胆な画面構成が光る。

睡蓮　Water Lilies

クロード・モネ
Claude Monet (1840 - 1926)

1883年、ジヴェルニーに転居したモネは、庭に池を造り、この池をモチーフに睡蓮の連作を描いた。本作は1908年に描かれた15点の連作の1点。睡蓮と池、そしてそこに反映された空は、淡く明るい色彩を放って溶け合い、調和した画面を創り出している。

春、朝、曇り、エラニー　Spring, Morning, Cloudy, Eragny

カミーユ・ピサロ
Camille Pissarro (1830 - 1903)

エラニーはピサロが晩年の制作拠点とした村。画家はアトリエから眺める果樹園の景色を、連作として描いている。1900年春に描かれた本作には、新緑の鮮やかさや満開の林檎の花のほのぼのとした美しさが、花曇りの日差しの中に捉えられている。

読書する女　Reading Woman

ピエール=オーギュスト・ルノワール
Pierre-Auguste Renoir (1841-1919)

読書や音楽など、日常を楽しむ女性の姿は、ルノワールが好んで描いた題材である。モデルの女性はクッションの効いたソファに裸足で座り、読書にふけっているが、その姿は後ろ向きという面白い構図である。

ロンドン、ハイドパーク　Hyde Park, London

カミーユ・ピサロ
Camille Pissarro (1830 - 1903)

ピサロは生涯に4度、ロンドンを訪れており、本作は2度目の滞在となった1890年に描かれた。初夏の公園が、淡く優しい色使いで表現されたこの絵には、この頃の画家が、自然と光が織りなす微妙な色彩への理解をより深めていたことが伺える。

散歩　Promenade

エドゥワール・マネ
Edouard Manet (1832 - 1883)

本作のモデルはマネの友人ガンビー夫人。流行の黒い衣装に身を包み、黄色の手袋をはめて優雅に散歩している夫人の一瞬が捉えられている。素早い筆致で描かれた背景の緑が、人物の躍動感を際だたせている。1880年頃に描かれたマネ晩年の傑作。

森の小憩、ジェルブロワ　A Break in the Woods, Gerberoy

アンリ・ル・シダネル
Henri Le Sidaner (1862 - 1939)

白布の上の果物、パン、ワインなどの小道具が、背景の木陰の大道具とともに《草上の昼食》のシーンを想起させる。枝に掛けられた帽子や無造作に置かれたバラの花は、若い女性の匂いを漂わせている。人影はないが、人の気配は明瞭である。

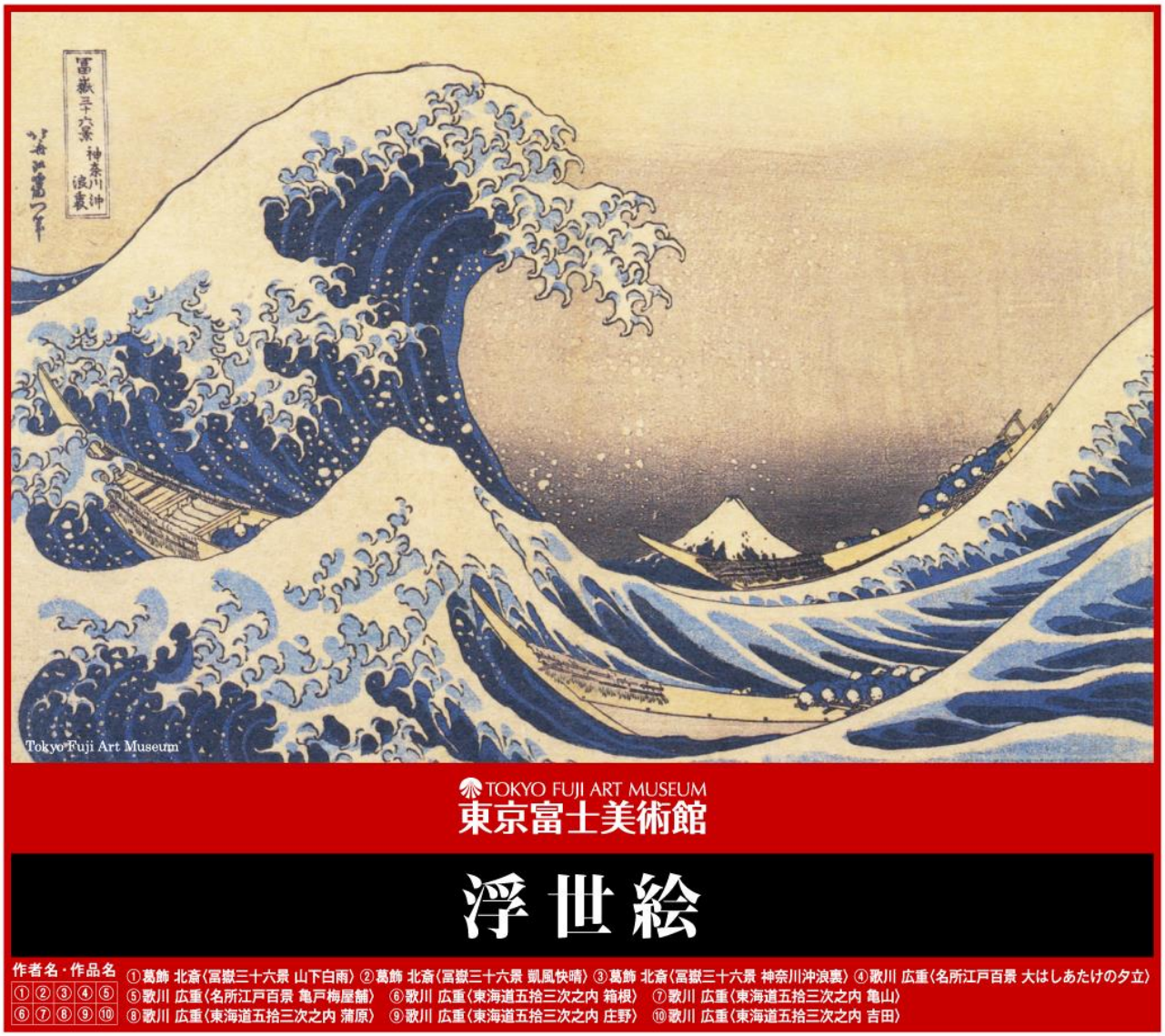
赤い服の女　Young Woman in Red Dress

ピエール=オーギュスト・ルノワール
Pierre-Auguste Renoir (1841-1919)

ルノワールは、流行の衣服やおしゃれな帽子で着飾った女性たちを、生き生きと描き出した。本作のモデルが着ている肩の膨らんだドレスと赤いリボンの黄色い麦わら帽子も、当時の流行のファッションである。

【浮世絵】

●切手デザイン


Tokyo Fuji Art Museum
TOKYO FUJI ART MUSEUM
東京富士美術館
浮世絵
作者名・作品名
①②③④⑤
⑥⑦⑧⑨⑩
①葛飾 北斎〈冨嶽三十六景 山下白雨〉 ②葛飾 北斎〈冨嶽三十六景 凱風快晴〉 ③葛飾 北斎〈冨嶽三十六景 神奈川沖浪裏〉 ④歌川 広重〈名所江戸百景 大はしあたけの夕立〉
⑤歌川 広重〈名所江戸百景 亀戸梅屋舗〉 ⑥歌川 広重〈東海道五拾三次之内 箱根〉 ⑦歌川 広重〈東海道五拾三次之内 亀山〉
⑧歌川 広重〈東海道五拾三次之内 蒲原〉 ⑨歌川 広重〈東海道五拾三次之内 庄野〉 ⑩歌川 広重〈東海道五拾三次之内 吉田〉
Tokyo Fuji Art Museum
NIPPON 52
○ 切手と写真部分を郵便物に貼って、ご利用いただけます。
写真部分だけでは、切手としてご利用いただけません。
○ 郵便料金納付のためにこの切手をご利用の場合、写真部分に消印がかかることがあります。

●解説書

浮世絵

冨嶽三十六景　山下白雨
Thirty-six Views of Mount Fuji: Shower Below the Summit

葛飾北斎
Katsushika Hokusai (1760 - 1849)

白雨とは夕立のこと。快晴の山頂に対し、山麓に下ると漆黒の闇に包まれ強烈に走る一瞬の稲妻が描かれ、地上で激しい雨が降っていることがイメージできる。「黒富士」とも呼ばれ、冨嶽三十六景のシリーズの三役のひとつに数えられる。

冨嶽三十六景　凱風快晴
Thirty-six Views of Mount Fuji: Fine Breezy Day

葛飾北斎
Katsushika Hokusai (1760 - 1849)

凱風とは南風のこと。夏から秋にかけての晴れた早朝に、富士が山全体を赤く染めて輝くことがあるという。「赤富士」とも呼ばれ、「山下白雨」「神奈川沖浪裏」とともに、冨嶽三十六景のシリーズの三役のひとつに数えられる。

冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏
Thirty-six Views of Mount Fuji: The Great Wave off Kanagawa

葛飾北斎
Katsushika Hokusai (1760 - 1849)

眼前で激しく動く大波と波間から遥か遠くに鎮座する富士山。動と静、遠と近を対比させるような構図である。波に翻弄されているのは「押送り(おしおくり)舟」と呼ばれる舟で、当時伊豆や安房の方から、日本橋などの市場に鮮魚や野菜を運搬していた。

東海道五拾三次之内　箱根
Fifty-three Stations on the Tokaido: The Lake at Hakone

歌川広重
Utagawa Hiroshige (1797 - 1858)

多彩な色と奇抜な形の組み合わせによって描かれた、広重の傑作中の傑作である。
「天下の険、千尋の谷」と唄われた箱根の峠越えの厳しさをとらえた、圧倒的な量感に溢れた山の描写は、他の版図を凌駕している。

名所江戸百景　亀戸梅屋舗
Plum Garden at Kameido, from the Series One Hundred Scenic Spots of Edo

歌川広重
Utagawa Hiroshige (1797 - 1858)

「亀戸梅屋舗」には龍が大地に横たわったような見事な古木があり、臥龍梅と名付けられて、江戸の人々に親しまれていた。広重はこの臥龍梅を手前に大きく近づけ、大胆な遠近法による構図で描き出している。本作は、ゴッホが模写したことでも知られる。

名所江戸百景　大はしあたけの夕立
Sudden Shower over Shin Ohashi Bridge and Atake, from the Series One Hundred Scenic Spots of Edo

歌川広重
Utagawa Hiroshige (1797 - 1858)

激しく降りだした夕立に、傘やむしろをつけて足早に急ぐ人々の姿が印象的である。角度と濃さのちがう2種類の線で表現された雨が画面により一層の深みを与えている。本作は、《亀戸梅屋舗》とともにゴッホが模写したことでも知られる。

東海道五拾三次之内　亀山
Fifty-three Stations on the Tokaido: Clear Weather After Snow at Kameyama

歌川広重
Utagawa Hiroshige (1797 - 1858)

空は朝焼けに染まり始め、冬の朝の澄んだ空気が見事に表現されている。画面右上には亀山城が姿を見せ、その下の極端な勾配の中を大名行列が登っていく。白と黒のモノトーンで描かれた雪景色のなか、行列にわずかに施された色彩が画面にアクセントを与えている。

東海道五拾三次之内　蒲原
Fifty-three Stations on the Tokaido: Night Snow at Kanbara

歌川広重
Utagawa Hiroshige (1797 - 1858)

人物以外を白と黒で統一した画面には、静寂に包まれた雪の夜の心細さが見事に描き出されている。現実の蒲原は温暖な気候で雪深い地域ではなく、また地形が一致する場所もないため、広重の想像で描かれたと考えられている。

東海道五拾三次之内　庄野
Fifty-three Stations on the Tokaido: Evening Squall at Shono

歌川広重
Utagawa Hiroshige (1797 - 1858)

白雨とは夕立のこと。坂を必死に登る駕籠かきと転げ堕ちるように駆け下る旅人と農夫。そこに夕立が坂と直角に交差するように降り始める。雨雲を感じさせる空のぼかし、雨しぶきに煙る竹林のシルエットの濃淡、白雨の言葉のとおりの夕立の繊細な色合いが見事である。

東海道五拾三次之内　吉田
Fifty-three Stations on the Tokaido: Toyokawa Bridge at Yoshida

歌川広重
Utagawa Hiroshige (1797 - 1858)

画面右の足場が組まれた建物が吉田城の天守閣で、左官職人が壁の補修をしている。鳶(とび)の男は足場の頂上に登りなにやら遠くを眺めている。
大屋根に職人を配する図は、北斎の『冨嶽三十六景』にも見られる構図である。